

【準決勝】

習志野 vs 東京学館浦安

習志野、学館浦安ともに1-4-4-2システムのドイスボランチのフォーメーションでキックオフ。学館浦安は前線にシンプルにロングボールを配給し、2トップの選手が競ったボールを拾って攻撃を展開しようとする。習志野は、中盤の競り合いで収めたボールを落ち着かせ、学館浦安のDFラインの前のスペースを使って前向きの選手を作る。高い位置でボールを収めるとコンビネーションや追い越しを使ってゴール方向にボールを前線させ、クロスやシュートに繋げる。習志野は切り替えの意識が高く、奪われたボールを回収して2次攻撃に繋げるシーンが目立つ。習志野は中央とサイドを上手に使い分け相手の視野を奪っての攻撃、足元と背後をバランスよく使い分けたDFラインを前後に分断する攻撃をバランスよく展開した。習志野はCB⑤関、⑧松戸のヘディングと1対1の強さを中心に学館浦安の2トップに良い形でボールを収めさせず、ドイスボランチのプレスバックやGK菅野のセーブも含め得点を許さない。

学館浦安は⑩春藤の推進力やポストプレー、⑥今野のセカンドボール回収やボールキープで攻撃のきっかけを作るが、最後の精度を欠き決定機に繋げることができない。試合終了まで献身的にプレーを続けたが得点を上げることができず、守備ではシンプルなミスやDFラインの不安定さから習志野に5得点を許す結果となった。

攻守ともに試合をコントロールした習志野が決勝に進出し、関東大会出場を決めた。

日体大柏 vs 専修大松戸

日体柏は1-3-4-2-1、専大松戸は1-4-2-3-1のフォーメーションでキックオフ。専大松戸は⑩齊藤を起点に攻撃を展開しようとし、背後への抜け出しやポストプレーで攻撃のきっかけをつかもうとする。日体柏は守備時に両SHを低い位置に置いて5バックになり、前3名で高い位置からプレッシャーをかける。攻撃時は前線の選手が背後にアクションを起こしてボールを配球し、セカンドボール回収から勢いを持ってゴールに向かう。前半は専大松戸がボールを動かし、日体柏が奪いに行くというような展開となった。専大松戸はショートパスとコンビネーションを用いてシュートシーンを作り出す。日体柏はボール奪取で入れ替わり、カウンターで勢いよくゴールに向かう。後半になると球際の競り合いの回数が増え、切り替えの回数が多くなる。日体柏は奪ってからの切り替えのはやさでサイドから決定機を作り出し、専大松戸は奪い返した後のカウンターやセットプレーでチャンスを作るが互いに決め切ることができない。80分で勝敗は決まらず、試合は延長戦へ進む。日体柏はダイナミックなパワープレーとセットプレーでゴールを目指し、専大松戸は要所でテクニックやパスワークを発揮し互いの意図が感じられるゲーム展開となる。運動量のある攻防が続く中、延長後半に日体柏がGKのディストリビューションからカウンターを仕掛け、クロスから先制する。これが決勝点となり日体柏が1-0で勝利した。両チームとも最後まで走りきり、お互いに自チームの意図を発揮した好ゲームであった。

【決勝】

習志野 vs 日体大柏

習志野は1-4-4-2、日体大柏は1-3-4-3のフォーメーションでキックオフ。序盤から、互いにリスクを冒さず、ボールを早く前線に送り、セーフティーな試合運びのなかからチャンスをうかがう。しかし、両チームとも守備組織がしっかりしており、互いにチャンスを作らせない。習志野は、⑤関と⑧松戸の両CBを中心に、打点の高いヘディングと1VS1の強さで攻撃を跳ね返し、日体大柏は守備時、両サイドが3バックの隣に落ちて、5バックとなり、コンパクトな守備ブロックを形成する。中盤のセカンドボールについても、両チームとも寄せが早く、試合は拮抗した展開となった。

後半になっても、膠着した状況が続いたが、63分、日体大柏が均衡を破る。左サイド②梅木のクロスを中央⑩耕野が頭で流し、右サイドの⑳小林がファーストタッチでペナルティエリアに侵入、強烈なシュートで先制点を奪った。追いつこうとする習志野は、サイドバックの積極的なオーバーラップなど、攻撃に人数をかけ、相手ゴールに迫ったが、日体大柏が粘り強く対応し、しのぎ切り、1-0で勝利をおさめた。

試合全体としては大きな波が少なかったが、それは実直にハードワークをこなし、共に最少失点で勝ち上がってきた2チームであることを考えれば、必然であろう。緊張感のある好ゲームであった。

専修大学附属松戸高等学校 野村 太祐